



ひげのスコープ!

Scope of beard

QR



自宅近くの川岸にいくと、寄せる波の高さと音は、時に平坦で穏やかであり、時には高く大きい。ここは、自然の営みと学びの融合を強く刺激してくれる場所である**QR**。

筆者の車は、ナビゲーションの地図が示す進行方向の矢印を、常に画面上に向くような設定にしてある。しかし、表示される地図を常に北に向け利用することもできる。後者の場合には、前者の見かたにするため、筆者は、一度、頭の中で地図をイメージし動かす操作が必要になり、わずらわしい。

新聞に書かれた地図を見るときにも、同じことが起こる。つまり、筆者は、多くの場合、新聞紙そのものを回転させて見ることが多い。

読者の皆さんは、いかがであろうか?

実は、筆者には、「空間認知能力が低い」という自覚がある。視聴覚教育が、空間のみならず時間の広がり、つまり、イメージを広げ新たな発想の展開に寄与するという事実の存在にもかかわらず、である。ただし、ここでご注意。「空間認知能力が低い」ことが、良いことか悪いことかは、問題では無い。むしろ、「空間認知能力が低い」という「性質」を、今風には「個性」を、筆者が有している、ということである。

同じように、記憶力や判断力、また、行動の積極性、迅速性、あるいは、思考様式の例をあげれば「帰納的か演繹的か」、「拡散思考か集中思考か」等々。こうした「性質」の優劣を「良し悪し」の規準で、問題とはしない、という考え方。身体にかかわることでも、今は、何事も「個性」と考える時代。インクルーシブ教育の基本である。

唐突であるが、もう一つ。読者には、こんな経

験はないだろうか。つまり、「つり橋を渡るとき、○○○に注意して渡ってください」とか、「こうして、ブランコを押してやれば、大きく振れるし、こうすれば止められる」とか。あるいは、こんな疑問。「なぜ、あんな小さなバイオリンから、ココロのみならずカラダを揺るがすほどの、大きな音が出るのか」。

つり橋それ自身の揺れと歩く人の歩行の調子。ここではあえて揺れと調子と記したが、そう、「振動数」である。楽器の場合は、弦のそれと筐体の中および周囲の空気のそれ!「共振」「共鳴」である。

5年余りが経過した今

でも、日本のみならず世界の人々に痛ましい記憶の一つとして刻まれ、心と生活の奥深くまでに残っている「東日本大震災」の津波。波の高さが大きくなる原因の一つは、理科や音楽で学んだ「波の重ね合わせ」、「干渉」である。

教育では、「適性処遇交互作用」、Aptitude Treatment Interaction、略してATI(エーティアーアイ)という。「学習者が有する才能や性質は、指導者の処方、つまり、指導者が選択し使うメディアと、相互に干渉し合う」という実験事実である。

指導者は、メディアを、学習目標、対象者の「個性」、つまり、広くは一人一人の「発達段階」を見極め、選択し利用する。加えて、教科・科目、あるいは一般的に「課題」の性質に応じ、学びと指導の効果、効率を最大限に発揮するため、周到な教育活動が設計され、評価、そして、実施される。

「課題」つまりTaskのT、学習者の有するあらゆる「性質」「個性」つまり「特性」(Trait)を勘案したTTTTI、Task Trait Treatment Interactionが、メディアと学習者が多様化する中、視聴覚教育の基礎・基本の研究と実践の重要課題の一つである。

きょうようと
きょういくのままに

②

東京学芸大学名誉教授 篠原 文陽児